

静岡
SHIZUOKA

ロボカップジャパンオープン 沼津で開催 —20万人都市で初の試み—

5月3～5日、「ロボカップジャパンオープン 2008」が沼津市のキラメッセぬまづ、沼津市民体育館で開催され、過去最高の海外16チームを含む208チーム、736人が参加、3日間の大会中に延べ3万2,500人の来場者を数えた。沼津市では次代を担う子どもたちにロボットに直接触れる機会を提供しようと、市内の小中学生全員を対象に1万8千枚の無料招待券を配布。子どもたちに引っ張られる形で参加した父兄の姿が目立ち、当日チケットの販売は予想以上の売れ行きを示した。また、新たに選手にゼッケンを着用、解説者による試合内容の説明、大型モニターの設置など観客の視点に重きを置いた運営がなされ、観客と選手が一体となり歓声と笑いが絶えない大会となった。

「ロボカップ」とは、“2050年までに、サッカーの世界チャンピオンチームに勝てる自律型ロボットのチームを作る”ことを目標に、90年代初頭日本の学者たちによって提唱された国際プロジェクトである。97年から世界大会が開催され、現在では世界約40カ国・地域で約4,000人の研究者・学生が取り組んでいる。98年から始まったジャパンオープンは、今回で9回目を迎えたが、従来は大都市を中心に開催されており、人口20万人規模の都市での開催は今回が初めてである。

沼津市のものづくり産業は中小企業がその大半を占め、螺子産業を中心に培われてきた。近年では、県のトライアング



「ロボカップサッカー」4足ロボットリーグ(沼津市広報課提供)

ルリサーチ構想に基づく、静岡がんセンターを核とするファルマバレー・プロジェクト(富士山麗先端健康産業集積プロジェクト)と結びついて成長著しい企業も増えている。そのようななか07年に行われた、ものづくりのトップ競技イベント「第39回技能五輪国際大会」に続き、「ロボカップジャパンオープン 2008」も成功裡に終了した。

同市では、これらを契機に盛り上がったものづくりの機運を、一過性のものに終わらせることのないように、今後「ロボット工作教室」を毎年開催していくほか、ロボカップ出場選手の育成・啓発のため、市内の大学や高専、工業高校、技術専門校の教員や父兄を中心に「ロボカップ沼津ノード運営委員会」を立ち上げた。さらに、今年11月に予定している子どもたちのミニ技能五輪である「ジュニアスキルズ 2008」を通し、静岡県東部の「ものづくり」の機運醸成に努め、「ものづくりの県東部」の発信を継続して行っていく方針である。

神奈川
KANAGAWA

「氷川丸」がリニューアルオープン —開港150周年を前に新たな船出—

横浜港のシンボルとなっている「氷川丸」(11,622トン)が全面改装され、開港150周年を前に新たな船出をした。旧オーナーの日本郵船が、解散した運営会社から船体を引き継ぎ、約10億円をかけて建造当時の輝きを復元。「日本郵船氷川丸」と船名を改め、再デビューを果たした。

氷川丸は戦前の大型客船の唯一の生き残りであり、世界的にも極めて貴重な海事遺産とされる。横浜市は2003年、市指定有形文化財に指定。日本郵船も「歴史の生き証人を少しでも長く保存することが社会的使命」という心積もりで全面改装を行った。

現存するデザイン画や写真を参考にして、建造当時のアールデコ様式の内装を復元。改装前にシャンデリアが吊り下げられていた一等食堂の天井ははがして、天窓に戻した。喜劇王チャップリンらが滞在した一等特別室も、ステンドグラスをあしらった船窓を含めて内部を公開した。

華やかな客室やパブリックスペースとは対照的に質実剛健といった雰囲気船長室、羅針盤や舵輪などアナログな機器が並ぶ操舵室も見学できる。また、新設した展示室「氷川丸の航跡」では、同船の竣工から引退までの30年間の歴史を豊富な資料や写真でたどることができる。

氷川丸は1930年、横浜船渠(三菱重工業横浜製作所の前身)で竣工。日本郵船所属の貨客船としてシヤトル航路に就航し、食事のおいしさを評判を呼んだ。41年、戦況の悪化に伴って同航路が閉鎖。政府に徴用されて大改造を行い、傷病兵



1年4か月ぶりに再デビューを果たした「氷川丸」=横浜港・山下公園前

を収容する病院船となった。戦後は、復員船として邦人の引き揚げ輸送などに従事。50年日本郵船に戻され、3年後にシアトル航路に復帰した。しかし、寄る年波には逆らえず、60年に引退した。戦前、戦後を通じて北太平洋を254回も横断し、延べ25,000人余の乗船客を運んだ。

横浜港のシンボルとして山下公園前に係留されたのは61年。開港100周年を記念して市民らが熱心に誘致した結果、実現した。ほぼ同時期に建設されたマリントワーとともに、地元財界などが出資した氷川丸マリントワー株式会社が運営していたが、両施設とも入場者が91年をピークに減少。

業績回復の見通しが立たないため、同社は06年12月に解散し、両施設も営業を一時終了した。その後、氷川丸は日本郵船が、マリントワーは横浜市が引き継ぎ、開港150周年(09年)を期しての再開が決定。一足早く改装が終わった氷川丸は今年4月、再デビューを果たした。

旧・氷川丸には、係留以来46年間で延べ2,221万人が訪れた。日本郵船は、再デビュー後の入場者を年間30万人と堅めに見積もっている。

